海へ

greentea0117

海へ

　あるところに石があった。石は河原をころころとすべりおちて、ぽちゃんと水に入った。
「うむ、水の中はきもちいい」
　石はつぶやいた。その上を魚がひらり泳いでいく。銀色で青い点々がある魚だ。その魚はすぐにまた戻ってきては向こうへ行ってしまう。
「泳げたらさぞきもちがいいだろう」
　石は思った。そのときおどろいたことに魚は石の上にぴたりと止まった。体をそよそよと動かして流れに抵抗している。
「あんたさっき河原からおっこちてきたね」
　魚は言った。
「あんたすべすべしているからすごく目立つんだよね。気づいてた？」
　石は周りをみまわした。灰色のごつごつした石、黒くて丸い石、灰色の石……。
「他にもすべすべした石はあると思うけど」
　石は言った。魚は首を振った。
「いやなかなかいないよ」
「ふーん」
　石は言ったが、ほんとうは魚が自分の上でとまってくれたことがうれしくてならないのだった。そこへかにがやってきた。
「何の話？」
「この石はすいぶんすべすべしてるなあと思ってさ」
「ああ、ほんとだ」
　かにはうなずいた。
「水面を見て」
　かには言った。
「雨が降ってきたよ」
　石と魚は水面を見上げた。そこにはいくつもの輪ができては消え、できては消えしていた。
「大雨になるよ」
　魚は言った。魚が言った通り大雨になり、川はごおっと流れた。かには岩の間にひっこみ、魚は藻の中にもぐりこんだ。石はころころと流された。

「ああ、せっかく魚が自分の上にとまってくれたのに」
　石は思いながらころころと流されていった。あちこちにぶつかってどんどん小さくなっていった。
「かにもほめてくれたのに」
　石は残念でならなかった。雨がやんで川がまた静かになったころ、石はすっかり小さくなっていた。
「ふーむ、すっかり小さくなってしまった」
　石は思った。すると周りの石たちがのぞきこんで、
「きみ、ずいぶん小さくてすべすべした石だね」
　と言った。
「ずいぶん目立つね」
「そう？」
　川に入ってからどうも自分はずいぶんと注目をあびる。
「あちこちぶつかってすっかり小さくなった」
「そうだね。きっとやわらかい石なんだろう」
「できたら海まで行ってみたかったけど。こんなにちいさくなっちゃったからもう無理だろうな」
「そうだね。海まではたぶんまだまだだよ」
「だれか海を見たことある？」
　石たちは首を振った。
「海まで行ったことのあるやつを探してきてやるよ」
　やがて大きな魚がやってきた。
「海にはくじらやらたこやらいろんなやつらがいるよ」
　大きな魚は言った。
「くじら？　たこ？」
「くじらはすごくでかいんだ。この川なんか浅すぎて泳げないくらい」
「川からはみでるってこと？」
　石はおどろきちょっととびはねた。
「そう。たこは長い足を八本ももってやがる。とにかくでかいとこさ、海っていうのは」
　大きな魚は言った。
「どれくらい？」
　石は聞いた。
「そうだなあ」
　大きな魚は考えた。
「泳いでも泳いでも泳ぎぎれないくらいでかいのさ」

　石は納得した。
「僕も海へ行ってみたかったよ」
「行けるかもしれないぜ。なんせきみはとても小さいんだ。川の流れが、海へとおしながしてくれるかもしれないよ」
「そうだね」
「さて僕はもう行くよ」
「どこへ？」
「さてね。仲間を探すよ」
「そう」
　大きな魚はあっという間に泳いでいってしまった。
「海に行ってみたいな」
　話を聞いていた石たちは言った。
「僕もさ」
　石は言った。
「海の底には当然石があるんだろう。だから海に行ったことのある石もいるんだな」
　石の一つが言った。
「そうだね」
　石は言った。海は果てしなく広い。この川よりもずっと。
「いつか行けるといいな」